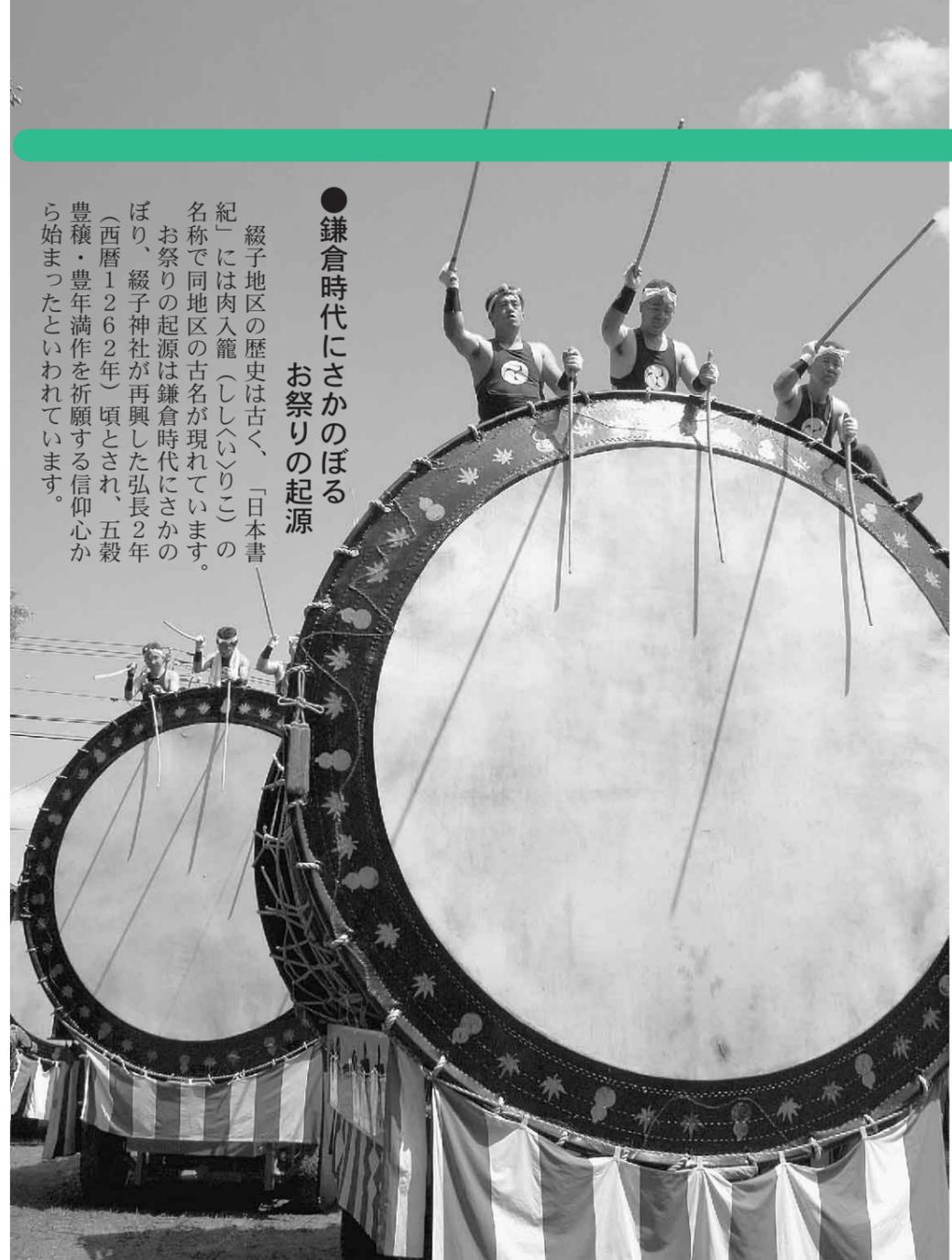


特集

大太鼓を打ち鳴らし、豊年満作を祈願
綴子大太鼓祭り



鎌倉時代にさかのぼる
お祭りの起源

綴子地区の歴史は古く、「日本書紀」には肉入籠（ししへいりこ）の名称で同地区の古名が現れています。お祭りの起源は鎌倉時代にさかのぼり、綴子神社が再興した弘長2年（西暦1262年）頃とされ、五穀豊穣・豊年満作を祈願する信仰心から始まったといわれています。

綴子大太鼓祭り

大音響を轟かせ、神社に向う大太鼓

大太鼓は現在はトラクターで牽引されていますが、かつては馬で引かれていました。太鼓は、停止した状態では最大で上下両面16人の叩き手を必要としますが、行列では移動のため上側から叩きます。

神社境内で演じられた獅子踊り

親獅子の子獅子探しの所作を表現するといわれる下町の獅子踊り。3人組で演じられ、境内を太鼓を打ち鳴らしながら縦横に動き回る様は、たいへん躍動感に溢れています。



大人に負けじと張り切る子ども獅子



福祉施設で踊る子ども奴

奉納行事が始まる前、地区内にある特別養護老人ホーム「青山荘」前で子どもたちが奴踊りと獅子踊りを披露し、入所しているお年よりの皆さんにとっても喜ばれました。

作占い「湯立の神事」

神社では奉納行事が始まる前に、大なべにお湯を煮立てかき混ぜ、お湯の立ち具合でその年の作柄の豊凶を占めます。今年は「良」とのご託宣が告げられました。



お祭りの沿革

東北地方では最も古い八幡宮として知られる綴子神社（武内朋子宮司）の例大祭・通称「綴子大太鼓祭り」が、7月14日（宵宮）と15日の2日間にわたって行われ、直径4メートル近い大太鼓や、獅子踊りなどの郷土芸能が神社に奉納されました。このお祭りは700年以上の歴史があり、農業用水の不足に悩んでいた当時の村人たちの、雨乞いと豊作祈願の神事として始まったと伝えられています。

奉納は地区内の上町（うえまち）と下町（したまち）の2つの集落が徳川方と豊臣方に別れて1年交代で奉納が行われ、今年はお祭りで奉納される大太鼓は、雨乞いのため、雷鳴に似せて大きな音を轟かせる必要があったことから次第に大きくなり、現在下町の保有する最も大きな大太鼓は、直径3・71メートルにもなっています。平成元年、世界一大きな和太鼓としてギネス認定になった太鼓です。（上町集落の最も大きな太鼓は直径が3・8メートル）

当日は、3張りの大太鼓を打ち鳴らしながら、「ヤツパリ」といわれる棒術の使い手など100人あまりの隊列が、出陣行列を模して集落内を練り歩き、綴子神社に到着、地元の人たちや観光客が見守る境内で奉納行事を行いました。

